

騎士様の使い魔

3



▲レイド団長
ごりもと
強面の騎士団長。
ライトリーグの上司。

◀ ジュリエッタ
以前ライトリーグと
つきあっていた妖艶な女性。

▲ ルチア
アーシェが仲良くなった女性騎士。

▲ エヴァリス
王太子秘書官。なにかと
アーシェをかまつてくる。

▲ ユリア
王立魔術研究所の研究主任。
とっても研究熱心。



▼ アーシェ(猫)
^へり
変化の術で変身した
アーシェの姿。

▲ アーシェ
猫に変身できる女の子。17歳。
ライトリーグの専属侍女として
王城でがんばっている。

▲ ライトリーグ
サンクエディア王国騎士団副団長。
29歳。アーシェを溺愛し、彼女と
結婚の約束もしている。

抜けるような青空には雲ひとつなく、強い輝きを放つ太陽が燐々と光を振りまいている。

夏はあつという間に通り過ぎて、肌寒い秋の気配が忍び寄つてきているけど、今日は少し動けば汗ばむほどに暖かかった。

目の前の堅牢なつくりの鍛錬場には、気合のこもった声と硬い木剣を打ち合う音が響き渡つている。

私、アーシェ・グレイが、ここサンクエディア王国の騎士団副団長であるライトリーケ・ウォーロックの専属侍女として勤め始めて、もう八ヶ月になる。

その間、普段のお仕事に加え、新たに命じられた騎士団団長室付き侍女としてのお仕事もあつたため、毎日が目が回るような忙しさで過ぎ去つていった。

先日、侍女として、王城に勤める者としてもつと自覚を持つてお仕事をしなきや、と思い、ライトのお姉さんで、王妃陛下の専属侍女であるエルサーナさんに侍女としての心得を叩き込んでもらった。それは短い間のことだつたけれど、おかげで仕事に少しほう自信が出てきた。立ち居振る舞いもずいぶん板についてきたように感じる。

でも、それはあくまでも何かと私の邪魔をしてくるライトの誘惑を撥ね除けつつ、なのだけれど……

早く鍛錬場へ冷たいタオルと水を届けなくてはならない。カートの上段には、保冷の魔術をかけた大きな箱が載っている。騎士団団長のレイド様を通じて魔術師団団長のアクセル様に作っていたものだ。箱の中には、冷たい井戸水に浸して絞ったタオルがぎっしりと詰まっている。

その下には、大きな蓋つきの入れ物があり、甘い果汁を絞つて氷を浮かべた飲み物がたっぷりと入っている。もう少し寒くなったら、温かいお茶に切り替えようと考えている。

真夏の鍛錬場での訓練は本当に厳しい。騎士様は皆、風通しの悪い堅牢な石造りの建物の中で、汗をだらだらかきながらへとへとなつて剣を振るつている。そんな姿を目にした時、お仕事とはいえ、具合が悪くならないかと心配になつた。やわな鍛え方はしていないと言うかもしれないけれど、疲れが蓄積したら、いざという時に困るんじやないかしら。

それに、この厳しい訓練は女性の騎士様もこなしている。

うら若き乙女が汗まみれのままで平気であるはずがない。

そう思つて、私はレイド様に、一日一回のタオルと飲み物の差し入れを提案してみた。余計なことはするなど怒られるかと思つたけれど、意外にもあつさり了承してくれた。それから出勤の日には、毎日このお仕事をしている。

もちろん、ライトがいい顔をするわけがない。何も進んで男たちの目にさらされに来る必要はない

いだらうつていうのがその理由。呆れるほどに変わらない、その子供っぽいやきもち。でも、

「ライトがお仕事をしているところ、見てみたい。それに、本当はライトにタオルを届けてあげたいんだけど、一人だけひいきするわけにはいかないでしよう?だから、皆さんと一緒に渡せば、変な目で見られることもないと思ったの。お願い、いいでしよう?」

と上目遣いで頼んでみると、渋い顔をしながらも、どこか嬉しそうに「いいよ」って頷いてくれた。

私も最近になつてようやくライトの扱いがわかつてきたみたい。

わかりやすく反発すると反発が返つてくる。怒れば頑なになる。素直にはうんつて言ってくれないひねくれものだ。本当に、子供みたい。

でも、お願ひしたり、甘えてみたりすると、意外と素直に言うことを聞いてくれる。そんなどころは、ちょっとかわいいかもしない。

大きなカートを押してアーチ型の入り口に向かうと、ちょうど重そうなドアが開いて、女性のグループが出てきた。交代で休憩に入つた女性騎士様たちだ。

その中に、背の高い赤毛の人を見つけて、私は手を振つた。

「ルチアさん!」
「アーシエ! いらつしゃい」

そばかすが浮いた頬に明るい笑みを浮かべて、ルチアさんが手を振り返してくれた。

ルチア・ウェスターさんは、猫に変えられた私がしばらくライトに飼われ、また人間の姿に戻つて孤児院に帰る時に送つてくれた人だ。

彼女はなんと男爵家のお嬢様。騎士団に入つた理由を尋ねてみたら、親に反発したかつた、なんて、照れくさそな顔をして答えてくれた。——体を動かすことや乗馬や剣術が好きで、それを親に認めてもらいたかつたんだ——そうして勘当かんどう同然で騎士団に入つた彼女も、今は家族と和解している。

「重そうだね。いつもありがとう。ほんとに感謝してるよ」

そう言つて優しい微笑みを見させてくれたルチアさんは、私の代わりにカートを押してくれた。

今まで私は、お仕事といつても團長室にずっといるだけだった。でも、きっとそれも、ライトにとつてよくなかつたと気づいた。

狭い空間で、いつも私が手の届く場所にいて、帰るのも同じ部屋。そういう距離感もあって、無意識のうちに、二人だけの閉じられた空間にいると錯覚してしまつたのかもしれない。だから、ライトは余計に私を束縛しようとするんだろう。

それに、専属侍女には團長室のお仕事だけじゃなく、騎士団の人たちの補助的なお仕事だつてあると気づいた。それはやっぱりエルサーナさんや王軍のトップであるラズウェル王太子殿下の仕事をぶりに触発されたからだと思う。

團長室のお仕事に慣れてくると、それだけでは時間が余つてしまつて手持ち無沙汰ぶさたで仕方がない。だから、一日一度は騎士団の詰め所に出向き、雑用をしたり書類を届けることから始めた。そして、何度もかに詰め所に行つた時に、たまたま内勤だつたルチアさんと再会したのだ。

「ああ、元気だつた？ 騎士団の専属侍女になつたと聞いていたけれど、全然会う機会はなかつたね。頑張つてる？」

そう最初に声をかけてくれたのは、ルチアさんだつた。

私たちすぐには打ち解けて、気安く話すようになつた。すると、ほかの女性騎士様たちとも、自然と仲良くなることができた。

元々騎士になる女性は、平民の方も多いらしく、身分とか生まれなどはあまり問題にならない。ずっと團長室にいて、こつちの詰め所には顔も出さなかつたでしよう。どれだけお高く留まつてるんだつて思つていたのよ

「だけど、話してみると全然印象が違うわね」

「あの副団長が片時も離さないなんて、想像できないわー」

「でも、こうして顔を出してくれて、いろいろ手伝つてくれて、本当に助かつてるのよ」

「ほら、私たち、書類とか……苦手だし」

「つい、後回しにしちゃうのよねー」

やつぱり、女性同士の会話は場が華やぐ。孤児院を出てお城に来て以来、こんな風に誰かとにぎやかに話をすることがなかつた。だから、すごく楽しい。もつと早くこうしていればよかつた、

といつもそう思う。

相変わらず貴族の侍女さんたちの態度は冷ややかなままだ。でもこうして女性騎士様たちと打ち解けたことで、その他の人たちの態度は軟化してきているような気がする。

用事で声をかけた時に無視しないできちんと応対してくれるようになつた人もいるし、私がちょっとミスをした時にこつそり助けてくれる人もいる。

自分が変われば、世界が動く。それは嬉しい変化だった。

鍛錬場の片隅にカートを停めた後、邪魔にならないようにそろそろと外に出る。カートを置いておけば、騎士様たちは休憩の時に自分からタオルを取りに来て給水する。だから、あとは頃合いを見てカートを取りにくればいい。

「ルチアさん、ありがとうございました。そういうえば、ルシーダ菓子店から、焼き菓子をたくさんいただいたんです。あとで詰め所に持つていきますね」

「ルシーダ菓子店？ ああ、あそこの奥さんが乗った馬車が、王都のすぐ外で盗賊に襲われたところを、たまたま隣町から戻ってきた小隊が助けたんだつけ？」

今まで、王都に近い場所で盗賊が出来ることなんてなかつた。だけどこのごろ急に被害が増えてきて、騎士様たちは体を休める暇がない。

「はい。お礼にと、昨日店主さん自ら持つてきてくださつたんです。今、団長室はすごく甘いにおいが漂っていますよ」

「はは、団長と副団長がお菓子に囲まれてるなんて、似合わないね！」

「ですよね。さすがに、うんざりした顔してました」

団長室の扉を開けるたびに、ふわりと香る甘いにおい。私はつい頬が緩んじやうけど、男の人はそうでもないみたい。

「胸焼けしそうだ。早く詰め所にでも置いてこい」

珍しく眉間に深いしわを刻んで、不機嫌そうにしているレイド様にそう言われた時には、思わず笑つてしまつた。

泣く子もだまる強面こわもてのレイド様は、普段は何事にも動じず、表情が変わることもあまりない。

感情が顔に出るのは、恋人のエルサーナさんが絡む時くらいなのに、今日は制服にまで移つたお菓子の甘いにおいに、はつきりとうんざりした表情を浮かべていた。お菓子は嫌いじゃないようだけど相当きつかつたんだろう。

そんなことを思い出していたら、ルチアさんが嬉しそうな表情で言う。

「ルシーダ菓子店の焼き菓子はおいしいよね！ 私、大好きなんだ」

「私です！ クリームの入つたパイがあつたんで、私はそれをいただきました」

「私はクッキーかな。さくさくでバターの香りがいいんだよね」

「レイド様もクッキー召しあがつてましたよ」

「ああ、団長はあまり甘くないお菓子が好きだね」

「ライトはあまり好き嫌いないですよね。お菓子も結構何でも食べますし」

やつぱり、女性は恋とお菓子の話だと盛り上がる。王都の菓子店の話をしていると、すぐ人にが集まってきて、あれやこれやと情報交換が始まるのだ。こんな些細なことも、今まで経験がなかつたから、すごく楽しい。

私は笑つてルチアさんの言葉に相槌を打ちながら、鍛錬場に視線をめぐらせる。

今日、ライトは指導教官としてここにいるはずだけれど……どこにいるんだろう？

その時だつた。

「式典警備計画案の照査の欄のサインが抜けておりました。お忙しいところ申し訳ないのですが、もう時間がないのでこちらに伺いました」

「ああ、すまない」

鍛錬場の入り口から、二人の人間が姿を現した。

一人はもちろんライト。細身で背が高く、髪は柔らかそうな金茶色。貴族然とした甘い雰囲気の美貌は、見慣れているはずなのにどきりしてしまう。

もう一人は、政務部付きの侍女さんだつた。

赤みがかつた金髪を耳の横でひとつに結い、顔はきれいに化粧している。控えめな態度に流れるようなしぐさ。そして、何よりきちんと仕事をしている。節度を持つてライトの前に立ち、質問にも淀みなく受け答えをする。その二人の姿に、きゅうつと胸が締め付けられた。

「で、この項目に少し変更を入れたいんだが、まだ間に合うか？」

「どこですか？」

ライトが指差した書類の箇所を、二人で身を寄せて覗き込んでいる。その光景を見ているといたたまれなくなつて、私はそつと視線をそらした。

「何もここに来てやることもないのに」

ルチアさんがため息交じりにつぶやいた。

最近、ライトの周りにこのような女性が増えたのは、気のせいではないと思う。

その原因の一端は私にあるから、私もため息をつきたくなるのだけれど。

少し前、ライトに憧れる侍女さんたちは、私が平民出身の孤児だということをあげつらい、「ライトリーケ様をたぶらかした女」と蔑んで、排除しようとしていた。

最初、私は王宮での自分の立場をよく理解していなかつた。だから、責められるたびに黙つてやり過ごしていた。

でもそれは、私を専属侍女として認めてくれたライトを貶める行為。「専属侍女は、雇い主の盾でいなければならぬ」。そうエルサーナさんに教わつてから、私は彼女たちの暴言を毅然として撥ね除けるようになった。

「私は何の地位も力も後ろ盾もないただの平民です。その私にライトリーケ様が簡単につぶらかされることはないでしょう？」それは、ライトリーケ様を侮辱する発言にほかなりません。私はライトリーケ様の専属侍女です。ライトリーケ様を侮辱するなら、私は全力であなたの方を排除します」

そう宣言した。

その結果、私を排除しようと/orする女性たちは、沈黙せざるを得なくなつた。そこで、彼女たちは、やり方を変えてきたのだ。

それは、直接ライトにアピールすること。

私は、自分ではつきり口にしたのだ。地位も権力も後ろ盾もない、と。

それならば……地位も権力も後ろ盾もあり、容姿も十分美しい自分たちが、アーシエ・グレイのような小娘に負けるわけがない。正面切つてライトリーク・ウォーロック本人に挑めばいい。

そうして今、ライトの周りには、美しくて何もかも申し分ない令嬢が集まつてきている。

彼女たちは、皆、有能な侍女だった。

……勝てる気がしない。

私は、専属侍女という立場以外に、彼女たちに勝るものがない。だから……こうして傍観するしかなくて、辛い。

「ああ、よかつた、ここにいたんだね。グレイさん、君に頼みたいことがあつたんだ」

目の前の光景を見ていられなくてうつむいていると、そんな明るい声が私の耳に響いてきた。

顔を上げると、柔軟な顔に青みがかつたグレーの髪の男性がこちらに向かつてくる。

「あ、トルクスタン様」

「いやだな、エヴァリスでいいですよ。そういう他人行儀なのは、あまり好きではないので」

「いえ、そういうわけにもいきませんから」

「真面目ですねえ。そういうところも好きですよ」

「いえ、あの、ありがとうございます」

いかにも育ちがよさそうな彼は、エヴァリス・トルクスタン様。伯爵家の三男で、王太子秘書官だ。彼の父は、王軍大隊長を務めていると聞いている。

王軍のトップであり、王太子でもあるラズウェル様には、軍の仕事とは別に王族としての政務もある。そちらには数名の秘書官がついていて、彼らはラズウェル様の指示を仰ぎながら仕事をしている。彼はその秘書官の一人だ。

そんな彼が、最近やたらと私にかまつてくる。それにいつも私に自分を名前で呼ばせようとするのだ。ほかの男の人を名前で呼んだりしたら、ライトが不機嫌になるのは目に見えているし、私もそこまでエヴァリス様と親しくなつたと思つていない。

何より、仕事である以上けじめは必要だと思うから、私は表面上は頑なに「トルクスタン様」と呼び続けていた。

最初に彼と会ったのは、二ヶ月前、ラズウェル様のお仕事関係で彼が団長室にやつてきた時だつた。

眞面目で、有能で、でも堅物すぎるわけではない。柔軟で端整な顔にいつも優しげな笑みを浮かべている彼は、よく私に話しかけてくれた。

それから、何故かだんだん「偶然に」出会う頻度が増えて、会えば必ず話しかけてくるように

なつた。時折口説き文句みたいなことも言うし、態度にも甘い雰囲気を漂わせているので困る。でも、それはいつも微妙に仕事がらみの話をしている時のことなので、無下に扱うこともできない。「書類をお届けにあがりました。これから団長室に戻るのでしょうか？」途中で確認したいことがあるので、「一緒にさせてください」

「は、はい」

そう言われてしまえば、私には断るすべがない。もとより、団長室に戻る予定だつたのだから、断るのもおかしいような気もする。それにエヴァリス様に他意がないのなら、断つたら気を悪くするだろう。

「そう言つていつもアーシュを連れ出すね。わざとやつているとしか思えないんだけど」

躊躇する私をかばって、ルチアさんが前に出た。険しい目で睨みつける彼女に、エヴァリス様はにつっこりと笑つてみせる。

「おや、ルチア殿。今日もお元気そうで何より」

「剣を振り回して暴れていると言いたいんでしょう。わかっているよ。遠まわしに嫌味を言つうのはやめてくれる？」

「どんでもない、深読みしそぎですよ。それに、グレイさんのことですが、僕は効率よく動こうとしているだけです」

「どうだか。いつもいつも狙つたように鍛錬場に現れるくせに、わざとでなければなんなんだ？」
「僕がそんな姑息なことをするとでも？ 証拠はありますか？」

「証拠なら、あなたの胡散臭いその貼り付いたような笑い顔で十分だろう」

緊張感を漂わせながら、二人が対峙する。とはいえ、敵意むき出しで突つかかっているのはルチアさんだけで、エヴァリス様は涼しい顔で笑つている。

ルチアさんから一方的に見えない火花が散つて、私はため息をつきくなつた。

エヴァリス様がこうして現れるたびに、ルチアさんはいつも彼に食つて掛かる。いつの間にそん

なに親しくなつたの？ と聞くと、親しい訳ない！ って怒られてしまった。

うーん、でも、ルチアさんはエヴァリス様が現れると、すぐに飛んでくる。本当は仲が良いんじゃないのかな。でもそう言うと、「アーシュを守るためにだよ！」ってまた怒られてしまうから、口には出さないけど。

「あいつについてはいい噂を聞かないよ。あやつていろんな女性にむやみに優しくするから、女性との噂が絶えない。何より、恋人のいる女性に近づくなんて、危険以外の何ものでもない！ あいうのを女の敵つて言うんだ。油断しちゃだめだよ！」

ルチアさんは常々私にそう忠告しては、エヴァリス様を牽制することに余念がない。
元々正義感が強く、また貴族のお嬢様らしく潔癖などころもあるルチアさんは、女たらしな男性に嫌悪感を抱くようだ。

ルチアさんは私を守ろうとしているみたいだけど、すでに女の敵の代表みたいなライトに捕まってしまっている私としては、素直にありがとうとは言えない気もする。
「あ、あの、二人とも、もうその辺で……」

「団長室に直接行けばいいだろう。鍛錬場に来る必要があるとは思えないが」
おろおろと仲裁に入ろうとした時、思いがけずライトの声が近くで響いて、私は驚いて振り返った。

でも次の瞬間、その隣に添うように立つ侍女の姿に、私の心はしほんってしまう。
誇らしげに、凛と立つ彼女の目に、私は一切映っていない。まるで空気のように存在を無視されている。さらにはそれを一言も指摘しないライトの態度に、うつむくことしかできない。「一階の魔術師団に寄つてから来たんですよ。書類運用について、グレイさんに確認したいこともありましたしね。団長室に戻る途中で話をするつもりだつたんです。だから、こちらにいてくれてちようどよかつたんですよ」

エヴァリス様がグレイさん、と私を呼んだ時、ライトは眉の辺りに一瞬ぴりりと張り詰めた空気を漂わせたけれど、そのまま侍女さんに向き直った。

「そうか。それなら口を出すまでもないな。アーシエ、後は頼む」
「はい……」

……このところ、団長室以外でのライトの態度がそつけないと感じるのは、気のせいではないと思う。前は、男の人が私の名を呼ぶだけで怒りをあらわにした。自分以外の男性と二人だけで歩くなんて絶対許さなかつた。

そこまで嫉妬しなくとも、と思っていた私にとって、今の状況は歓迎すべきこと、なんだろうけれど。ライトの隣の侍女さんの姿が、そんな気持ちを苦い思いで塗りつぶすのだ。

だつて、私よりも大人で、きれいで、スタイルもよくて、何もかも持つている。

ライトの隣に立つと私よりも似合つていて思う時点で、もう負けてしまつていて。

そんな女の人気が、ひたむきに、まつすぐにライトを見つめている。私と同じ、ううん、もしかしたら私より強い思いを込めて。

ライトのお母さんは、現国王陛下の妹君に当たる。だから、ライトは順位は低いながらも王位継承権を持つていた。

けれど、そんな自分に下心を持つて群がる人たちがいるため、ライトは繼承権や相続権をすべて放棄している。それでも王国筆頭貴族ウオーロックの名前の威力は絶大だ。しかも騎士団副団長の地位にあり、おまけに貴族然とした美貌の持ち主。その彼を結婚相手にと望む女性は後を絶たない。ライトを思う気持ちだけは、誰にも負けない。そう信じているのに、簡単にその思いは揺らぐ。(ライトの隣に立たないで！)

今もそう叫びたいのに、二人の姿があまりにも絵になつていて、私は声を上げることもできなかつた。

「じやあ、ウォーロック様の許可もいただいたことだし、行きましょうか」

エヴァリス様につっこりと微笑まれて私はライトに背を向ける。未練がましく残した視線の先で、一瞬ライトと目が合つた気がしたけれど……それを確認する勇気はない、私はその場から逃げるように行くしかなかつた。

「アーシエ」

それでいいのかと、心配そうな視線を送るルチアさんに頷いて見せて、私はエヴァリス様と肩を並べる。

「トルクスター様、お話を伺います」

精一杯笑つて、私は隣のエヴァリス様を見上げる。今はお仕事の時間。どんなに苦しくても、心が痛くても、それを表に出しゃだめ。

「こちらの確認申請書ですが、現在はグランツ騎士団長の承認後、直接ラズウェル様のところに上がってきてますね」

「はい、毎回私がお持ちしています」

「ええ。それで、政務部でもラズウェル様に上がる前に確認したいという話が出てきました。そのため、書類にもうひとつ署名の欄を増やしました。今後は、政務部にこちらの書類をお持ちいただきたいんですね」

「わかりました。政務部からラズウェル様のところへのお届けはどのように?」

「それは政務部で回しますので、ご心配なく。書類が所在不明にならないよう、管理台帳を用意しました。政務部にいらした際にご説明いたしますが、グレイさんは書類を渡した旨のサインをして、その後受け取った旨の政務部執政官のサインを必ずもらつてくださいね」

「はい。気をつけます」

エヴァリス様の説明は、とてもわかりやすい。その柔らかい声は、聞く者を話に引き込んでしま

う。演説や講義をするのに向いているかもしないといつも思う。

しかし私はそれに聞き惚れる余裕はなかつた。

エヴァリス様が現れると、ライトはこちらに険しい視線を向けるのだ。もしかしたら、エヴァリス様のことで呆れられたのかもしれないと思うと、恐ろしくてたまらなくなる。

「放つておいたらどうですか」

「はい?」

そんな言葉が耳に入つて、私はエヴァリス様の顔を見上げた。

「何をですか?」

唐突な言葉の意味がわからず、首をかしげて問い合わせると、彼はニコリと笑う。

「ウォーロック副団長のことです。……見てられないんでしよう?」

痛いところを指摘されて、私は唇を噛んでうつむいた。

態度に出してはいけないと思っていても、やっぱりうまくいかないみたい。ため息をつくと、彼の手がすっと私の頭を撫でた。慌てて距離を取ると、彼は気にした風もなく笑う。

「こんなことを言つては気を悪くされるかもしれません、彼には、あなたはもつたいない」「もつたいない?」

「ええ。あなたは、素直で、誠実で、まじめで、そして恋にも一生懸命だ。その想いが彼一人に向けられていると思うと……妬けますね」

「や、妬けるって、どういう意味ですか?!」

「そういう意味ですよ。さあ、そろそろ団長室に着きますよ」

彼がさらりと言った言葉は、私の気持ちをひどく揺るがした。

なんて返せばいいかわからずにおろおろしていると、「騎士団団長室」と書かれた金のプレートの付いたドアの前に到着してしまった。仕方なくドアを開ける。

「ただ今戻りました」

失礼します。グランツ様、先にご連絡していた書類の件でお伺いしました
さつきの言葉はあっさりと流れていき、もう問い合わせる気分にはなれない。小さくため息をついて、私は自分の席に戻る。

エヴァリス様が近づいていくと、レイド様が顔を上げた。

レイド・グランツ様。王国騎士団團長を務めるその方は、背が高く、がつしりした体格で、夜の色のような紺の髪をざつと後ろに流している。視線を向けられた人が怯えるほど鋭い三白眼さんぱくがんをしているのだけれど、本当は穏やかでとても紳士的な、尊敬できる上司だ。

何と言つてもあのライトが頭が上がらない、数少ない人物なのだ。それだけで尊敬に値する。レイド様でなければ、気まぐれで気分屋で、気に入らなければお仕事をすっぱかし、上司の命令も聞かないようなライトを部下にはできないともっぱらの評判だつた。

しかも王国随一の剣の腕をもつてゐるレイド様は、王軍統括総司令官である王太子殿さんみつけんラズウェル様、魔術師団團長で王国随一の魔術師である第二王子アクセル様と並び、王国三強と呼ばれている。

レイド様と打ち合わせをしているエヴァリス様の、さつきの言葉と私の頭を撫でた手の感触を思い出し、私はもう一度ため息をつく。

エヴァリス様のことは、正直言つて、嫌いではない……でも、どちらかと言えば苦手だ。たぶん、私の方が打ち解ける前に、向こうが距離を詰めてきたからだと思う。

悪い人ではないんだけど、困るというのが本音。でも、お仕事で接触することもそこそこあるので、そういう態度を見せるわけにもいかない。

私だって、できることなら突っぱねてしまいたいと思つていて。でもそれができないから困つて

いるのに、ライトがそのことを責めるような態度を見せるとどうにも納得がいかない。

私は気を取り直して自分の仕事に戻る。

机の上に山のように積まれている書類は、種類ごとに分けて、棚に収めておく必要がある。中身をざつと確認して仕分け、穴をあけてひもを通し、表紙に挟んで綴じていく。

ひたすら没頭できるこのお仕事は好きだった。けれど、今度はライトと侍女さんの姿が頭に浮かんできて、作業に集中できない。

お仕事、うまくこなせるようになつてきたと思つてたのになあ。

自分なりに、公私はきちんと分けられるようになつてきたと思つてた。だけど、書類を綴じる手が止まってしまう。

……ライトの過去が、私の心を重くする。

いろいろな女性と付き合っていたということ。

辛いお仕事が終わるたびに、お酒と女性で気持ちを紛らわせていたこと。

責めたいわけじゃない。いまさら昔のことを蒸し返して謝らせたいわけでもない。もうそういうことはしないと約束してほしいわけでもない。

でも、最近のライトの態度が、不安で仕方がない。私では物足りないんじやないかって、釣り合はないということにライトが気づいてしまったんじゃないかなって、どうしてもそんな思いにとらわれてしまう。

と、不意に何かが眉間に触れて、我に返った。

「どうしたの、考え方？」

すごい皺

見ればエヴァリス様が私の目の前にかがんで顔を覗き込んでいた。そして私の額につけた人差し指をひっこめながら笑う。

「顔を触られた！」

ようやくそれを理解した私は、ガタンと音を立てて椅子ごと後ずさつてしまつた。

「な、ななな、なんで触るんですか!?」

「ごめん、嫌だった？」

「嫌ではないんですけども！」

そう、ただぞくつとしただけ。……不快ではないんだけど、なんだか納得いかないような、そんな変な感じ。

「じゃあ別にいいじゃない。あ、次からこの書類のことはよろしくね。じゃ、また」

「は、はあ。どうも……」

私の顔に触れたことなんかきれいさっぱり忘れてしまつたように、エヴァリス様はやけに親しげな口調で言つて、さつさと出ていつてしまつた。私は、専属侍女として叩き込まれた礼儀も立ち居振舞いもどこかに吹つ飛んでしまつて、間抜けな反応を返すことしかできなかつたけれど。

「……スルーされた……」

エヴァリス様は、なんで触るんだという私の疑問に、答えることなく行つてしまつた。

もしかしなくとも、はぐらかされてる……んだよね。

からかっているのか、遊んでいるのか。どちらにしても、私にはエヴァリス様が何を考えているのかわからぬ。

「お前は本当にわかりやすいな。さつきから百面相だぞ。おかしくて仕事にならん。少し控える」

「レイド様こそ、その言葉は何かいろいろおかしいですよね!?」

最近はこうしてレイド様にからかわれることも増えた。……レイド様は鋭い。きっと、最近の私の様子がおかしいことに気づいて、こうして気を遣つてくれているんだろう。それでも気持ちちは晴れず、私はため息をついた。

「あー、つつかれた！ アーシュ、お茶！」

「きゃあっ！ ちょっと、ちょっと！ 重いってば！」

「いいじやん。あー、いい抱き心地」

「どこ触つてるのよ、バカツ！」

ドアを開けて戻つてくるなり、ライトは座つて書類を分類する私に背後からのしかかつて抱き竦^{すく}め、撫^{なで}まわす。これは、いつものことだ。

こういう態度は変わらないのに、時々すごく冷たくなったり、女人の人といふところを見せびらかすようなこともする。最近のライトは、何かおかしい。

「もうつ、離してつてば！ お茶淹^{いれ}てあげないわよ!?」

「はいはい、わかつたよ」

「はい、は一回！」

「はいはい」

「もうつ！」

まとわりつくライトをようやく振り払つて、私はお茶の用意をするために席を立つた。

部屋の一角にあるガラス戸の付いた戸棚は、レイド様が用意してくださつたものだ。お茶が趣味のエルサーナさんと一緒に選んだというそれは、とても使い勝手がいい。中には茶器一式と、いろんな種類の茶葉が入つていた。

茶葉を計つてポットに入れ、お湯を注ぐ。その間に、ライトはレイド様に鍛錬場での様子を報告していた。

「第五小隊の連携が今一つなんだよな」

「ああ。あそこの小隊長はマルスだろう。あいつは腕はいいが、口がうまくない」

「本人にもその自覚はある。四苦八苦しながらも、努力しているのは誰の目にもわかるよ。もちろん部下にも伝わつてゐる」

「となると、原因は身分意識か」

「全部をそれで片付けたくないが、原因の一つなのは確かだな」

レイド様は眉間にしわを寄せ、ライトはため息をつく。

第五小隊の隊長——平民出のマルスさんは、部下である貴族の騎士様とどうもそりが合わないらしい。

彼は王軍の辺境砦^{とりで}から騎士団に移ってきた人で、実家は果実酒を作る工房だそうだ。^{かもく}寡黙で体が大きく、のつそりした熊を思わせる。口数は少ないけれど面倒見がいいと評判で、私も荷物を持つてもらつたことがある。

対して、部下であるラフエットさんは子爵家のご次男様だ。明るくて人当たりもよく、剣の腕も立つ。剣だけならマルスさんよりも上だと、以前ライトが話しているのを聞いたことがある。そして負けず嫌いで、努力家。だけど、たびたびマルスさんと意見が食い違うため、小隊はちょっとぎくしゃくしているようだつた。

「模擬戦になるとどうしてもラフエットが先走つて相手に突つこんでいくんだよ。おそらく、マルスより実力があるというところを見せたいんだろうが、それを周りが助けようとすると、統制が乱れるつてパターンだな」

「第五小隊は悪くない面子だが、模擬戦で負けが込むのはそれが理由か」

「まあね」

レイド様は、ライトから渡された訓練実施報告書にゆっくりと目を通している。

私がその報告書に目を通すことはないけれど、周りの人にわくライトの報告書は簡潔かつ的確にまとめられていて、読みやすいらしい。

いつもあれだけサボつてゐるくせに、いつ仕事をしてゐるんだろう？

「ほかの団員はちゃんとマルスの意図を汲んでいる。あいつの力不足というわけではなさそうだが？」

「ラフエットも、マルスの言いたいことはわかってはいるみたいだけどね。あの寡黙さをノリが悪いと思っているようだし、自分が剣の腕が立つと思っているから、マルスの下にいることが気に入らないらしい」

「そうか。……剣の達人が用兵の達人とは限らないんだが……」

「まあ、若い分頑ななんだろ。そこを認めてしまようと、負けたような気になるんだろうさ。そもそも相性の問題だから、入れ替えもやむなしか」

「そうだな、考えておいた方がよさそうだ。人選は任せる」

「了解」

「次、第六小隊」

二人は、報告書を見ながら次の小隊に話題を移す。そのやり取りは息がぴったりで、あうんの呼吸というのはこういうことを言うんだろうと、思わず感心してしまう。

二人の間では意思疎通が完璧にでき上がりがつていて、問い合わせへの答えもよどみない。時に嫌味の応酬があつたり、レイド様に怒られたライトがふてくされる時もあるけれど、この二人は相性がいいんだろうなあ。

それにしても、眺めているだけで部下たちの問題点を見抜くなんて、すごい。普段からみんなをよく注意して見てるんだろう。

レイド様が部下をきちんと見ているということは、普段一緒にいるからよくわかってる。だけど、ライトなんか好き勝手しているイメージしかないのに、なんでレイド様の質問にすらすら答えられるのかがすごく不思議！

私は、そつとライトを盗み見る。鍛錬場でのそつけない彼とは、まるで別人だ。私はこっそりとため息をついた。

どうしてそうなのか。何か意図があるのだろうか。ライトの考えていることが、よくわからない。

私は三つのカップにお茶を注ぎ入れた。

「お待たせしました、お茶です」

团长室の奥、窓を背にしたレイド様の机と、そしてレイド様の机に対し直角の位置におかれているライトの机、その隣の私の机。順番にお茶のカップを置いて、自分の机をまわりこむ。そして椅子に座ろうとしたら、隣からライトの手が伸びた。

「ちょつ、何、きやあつ!?」

手首を捕まえられて引き寄せられ、よろめいて座りこんだのはライトの膝の上。

「ちょっと、危ないじゃない、何するのよ！」

「大丈夫だよ、アーシェを危ない目にあわせたりしないから」

抗議する私の頬を大きな手でいとおしげに撫でながら、ね？　と甘い笑顔で覗き込んでくる。私はさつきのことでもあって、つい拗ねたようにふいつと顔を逸らしてしまった。けれど、それを気にした様子もなく、ライトは私の机にあるお茶のカップに手を伸ばし、さつさと自分の机に置いてしまった。

これは、このまま膝の上に居ろってことね……

レイド様も何も言わない。この後の私のお仕事は書類を綴じるだけ。遠慮なく休んでいいってことだ。

たまにこうして、レイド様公認のティータイムがあつたりする。そんな時私は書類を処理する手を休めて、お茶を飲んで気分転換をしつつ、お仕事の話を黙つて聞いている。そういうパターンがほとんどなんだけど。

でも、ライトの膝の上が、今日はどうにも居心地が悪くて仕方がない。

もちろん、いつもだって嬉々として乗ってるわけじゃないし！　でも……さつき、あんなに他の女人人とべったりしていたくせに。私がエヴァリス様と一緒に歩き出した時も引き留めようとなかったのに。それなのに、今しっかりと腰に回されている手は、いつものように私を離さない。

ライトは、何がしたいの？　私をどうしたいの？　何を考えてるの？



ひねくれ者の彼のことだから、どうせろくでもないことを考へてゐるんだろうって、わかつてはいるんだけれど。それでも、なんだか心の中がもやもやしてくる。

「それにしても、最近は盜賊の被害が増えてるな」

「そういや、このお菓子がここに来たのも、菓子店の奥方が盜賊に襲われて、それを助けたからだっけ？」

ライトが親指でくいと示したのは、応接のソファセットだ。そのテーブルの上には、焼き菓子がぎつしり入った箱が五つも置いてある。

ルシーダ菓子店は、王都でも有名な、大きなお菓子屋さんだ。お茶会やおもてなしの時に出される、小さな焼き菓子が特に有名で、味もさることながら、その種類の多さが特徴だ。聞いた話では、クッキー、ケーキ、パイ、メレンゲなど、百種類を超える品数だとか。

そのルシーダ菓子店の奥さんの馬車が街道で盜賊に襲われたんだそうだ。それもまだ夕方にもならぬ間に、結構人通りがある道で。

「白昼堂々と行く手をふさぐ盜賊なんて、聞いたことないけどな」

「あるいは、盜賊行為自体が、何かの囮おどりという線もありうるが」

眉を寄せ、レイド様は顎に手をあてて考え込む様子を見せる。

「なんにせよ、偶然でも小隊が通りかかったのは不幸中の幸いだつたな」

ライトの言葉に、レイド様がわずかに表情を険しくした。

「……しかし一人も捕まえられなかつたのは、失態以外の何物でもない」

「安心しろよ、つぶれるまで鍛えなおしてやつた」

さわやかに笑いながら怖いことを言わないで！

だけど、確かにこここのところ、盜賊に襲われたという報告書を、私もたびたび目にてる。それも、ここ一ヶ月くらいの間に、五件。王都の近くを荒らしまわるなんて、大胆にもほどがある。物騒だし、とにかく怖い。

「それにしても、街道の安全確保は王軍の仕事だろ。そつちはどうなつてる？」

「殿下も頭を痛めている。日星はついたらしいが、どうも東の峠を縄張りにしていた奴らが、王軍の締め付けで獲物にありつけなくなつて流れてきたらしいな」

「なんだよそれ。後始末まできつちりやれつての」

ライトが毒づくと、レイド様がカップに残つたお茶を飲みほした。

「というわけで、これからその件でラズウェル殿下と打ち合わせだ。お前も来い」

「……面倒だな。あんただけ行けばいいだろ」

「ではかわりにアーシェを連れていく」

「わかったよ、行けばいいんだろ！」

ラズウェル様は、何かと私にちょっとかいをかけてくる困つた方だ。元々女性がお好きなようだけれど、特に私をからかうのを楽しみにしているらしい。だからたとえ仕事でも、ライトは私がラズウェル様と会うことにいい顔をしない。

私はライトの膝の上から降りて、カップを片づける。

「アーシエ、俺たちが不在の間に、菓子を詰め所に持つていってく。部屋中が甘つたるくてかなわん」

レイド様がしかめつ面で言う。

「はい、わかりました」

続いてライトも言う。

「男と話すなよ、近づくなよ、近づかれたら逃げろよ。わかつた!?」

「理由もなくそんな失礼なことできません！」

もう、いつもそうやって子供っぽいことばかり言うんだから。

さらに、ライトは出ていきざま、私の腰に手を伸ばしてぐいっと引き寄せた。

「アーシエが色目を使ってもダメだよ。……エヴァリスにするみたいに」

おどけたような口調で、でも最後は氷みたいに冷たい声でささやかれた。一気に冷水を浴びせられたような気分になつてライトを見上げると、わずかに細くなつた目の奥に、苛烈な怒りの炎が踊つていた。

「そんな、私、何も……っ！」

反論する前に、ライトはするりと離れて出ていつてしまつた。残された私は、唇を噛んでうつむくことしかできなかつた。

私が何をしたの？ もしお仕事の話だつたら、断れないじゃない。それに、エヴァリス様は私に明確な意思表示をしたわけではない。それなのに勝手に警戒したら、すごく失礼だ。

それに、それに。

「ライトだつて、女人人とベタベタしてたくせに……！」

鍛錬場での光景を思い出して、私は握った拳を震わせることしかできなかつた。

茶器を片づけて、二人がいない間に部屋の掃除と書類整理を済ませる。ここしばらく忙しくて手を付けられなかつた書類棚の方にも手を入れて、古い書類を廃棄する。

廃棄用の箱に半ば叩きつけるように次々と紙束を投げ入れていくのは、完全な八つ当たりだ。私は一度手を止めて、深いため息をついた。

悔しいようなもどかしいような、何とも言えない変な気分だ。腹が立つて、ムカムカして仕方がない。

ライトになじられたこと。

ライトの態度。

色目を使つてゐるなんて言ったこと。

ライトが見せつけるように女人人に馴れ馴れしくしてゐたこと。まるで、私に落ち度があるつて言つてゐるみたいに。

言いようのない感情で、自分のすべてが真つ黒に染まつていく氣さえする。

「やだな。こんな気持ち、好きじゃないのに……」

ライトはどういうつもりなんだろう。どうして私ばかり責めるの？ 私だつてほかの部署の人と

の関係を悪くして、仕事に支障が出たら困るから、ある程度は受け答えしなきゃならない。エヴァリス様が公私混同をするとは思えないけれど、変に冷たくしたらいろいろなことがぎくしゃくしそうで嫌だ。

「ためだ、一人でいたらそればばかり考えちゃう。先にお菓子を置いてこよう」

ため息交じりにつぶやいて、私は書類整理を断念した。

お菓子の詰まつた大きな箱を抱えて廊下を進む間も、やつぱり考えるのはライトのことばかり。いつからあんな風になつたんだっけ、なんて、考えるまでもなかつた。エヴァリス様が、ラズウェル様の秘書官として騎士団に顔を出すようになつてからだ。

よく考えればああいう態度は彼なりの社交辞令とも思えるけど、私はうまく対応できなくて本当に困つている。

そのことをいくらライトに伝えてもまるで信じてくれないし、そういうこうするうちに女の人とベタベタし始めて、本当にストレスがたまる！

「ここにちは、差し入れでーす」

「アーシエ、いらつしやい！ 待つてたよ！」

詰め所のドアをノックして顔を出すと、すぐにルチアさんが出迎えてくれた。さつそくテーブルの上で箱を開けると、女性の騎士様たちが集まつてくる。

「なになに、お菓子？」

「あ、これ、ルシーダのお店のじやない!?」

「本当!? 私、あそこのお菓子大好き！」

「私も！ おいしいよねえ！」

女性たちのぎやかな歓声が上がる。たくさんの種類のお菓子を目の前にして、ああでもないこうでもないと群がる彼女たちを、男性は若干引き気味に眺めている。というか、きっとこの迫力に押されて近づけないだけなのかも……。

ここに来ると、基本的に女性騎士の皆さんのがつちりガードしてくれるし、そもそも男性はライトと勝負する気がないから平和なんだ。

……それは、ライトだってわかっているはずなのに。騎士様たちも、^{好き}好んでライトみたいに面倒な人を相手にしたくないから、ちゃんと節度を持つて接してくれる。

それなのに、なんであんな言い方。しかも私に「色目を使うな」だなんて、どういうこと!? 私が何したって言うのよ!

「アーシエ、どうかした?」

「あ、ご、ごめんなさい、なんでもありません!」

ぐるぐると考えていた私を心配したらしく、ルチアさんが顔を覗き込んでくる。慌てて首を振る私に、ルチアさんはため息をついた。

「午後の訓練での侍女のことは、早く忘れた方がいい。副団長も困つた人だ。わざわざあんなところでするべきもない話なのに、一体何がしたいんだか」「え、でも、お仕事の話ですよね？ 急ぎの用だつたんじゃないんですか？」

「あれは、副団長でないといけない話じやない。中央棟からだつたら、鍛錬場より団長室の方が近いし、団長に聞いたほうが早い。それを副団長に確認しに来る意味がわからない。副団長も副団長だよ、そんな見え見えの手にわざわざ乗つて見せて、何がしたいのかさっぱりわからない」

やつぱりあれはわざとなんだ。侍女さんの魂胆こんたんはわかるけど、ライトの方は何のために?」

「ライトは、私と別れたいのかなあ……」

「そんなわけないよ。エヴァリス様が来た時のあの噛みつきそうな顔、別れたいって人の顔じやなかつたよ」

「噛みつきそうな所で、ルチアさんが鬼のような顔をして見せるので、私は笑った。
「じゃあどうしてそんなことをして見せるんですか? 何かいいことでもあるの?」

「うーん、その辺は私も疎く……。ごめん、わからない」

二人して肩を落としてしまったものだから、なんだかおかしくなった。

私は男の人はライトしか知らない。ルチアさんも今までお付き合いした男性はいなかつたそうだ。二人とも恋愛の経験値は低い。低レベルの二人が頭をひねつたところで、答えなんか出るわけがない。

「いいです。面倒だし、後で考えます。お菓子食べましょう!」

「そうだね。甘いもの食べて、ちょっと落ち着こうか。何にする?」

「私はアプリコットのパイにします!」

「私はどれがいいかな。マテ茶のクッキーにしようかな」

「いいですね、そつちもおいしそう!」

はしゃいだふりをして、かわいらしい焼き菓子を口に運ぶ。さくさくして、ほろりと口の中で崩れるパイは香ばしい。甘酸っぱいアプリコットのジャムも絶品だ。でもどうしてだろう。苦いものを噛んでいるような気がして仕方がない。……やだな、気にしたくないのに。

詰め所の帰りにクッキーとパウンドケーキをお土産みやげに持たされて、私は団長室に戻った。まだ一人は戻っていない。打ち合わせが長引いてるのかな。

もうすぐ就業時間が終まる。私は後片付けをして、明日使う書類を準備した。そしてそのまま時間が来たので、ライトの部屋に帰った。二人ともいよいよ待たなくていいと言われているから、必要な伝言だけを残して素直に帰ることにしている。

部屋に戻つて部屋着に着替え、お茶を淹いれて一息ついた。体が埋もれそうなくらい柔かいソファにのんびりと寝そべつても、出るのはため息ばかりだ。

あのひねくれた思考回路の持ち主は、今度は何をたくらんでいるんだろう? それさえわかれば、こんなに悩むこともないのに。

いつだってライトは、余計なことばかり考える。仕方がないのかもしれないけれど、いつも不安と隣り合わせで生きている。たぶん確証が欲しいんだと思う。自分を裏切らないっていう、確かに証拠が。

だけどそんな気持ちは、形でなんか示せない。

どうしたら信じてくれるの？　どこまで言つたら信じてくれるの？

きりがないことはわかつてゐる。わかつてゐるけど……。たまに、どうしたらいかわからなくなる時だつて、ある。

……ぐるぐる考へてゐるうちに、少しうどうとしてしまつた。ドアが開く音で、私ははつとして起き上がる。

マントをまとつた制服姿のライトをして、思わず笑みが浮かんだ。でも……

「ここまででよろしいのですか？」

「ああ、助かつたよ。ありがとう」

女性の声の直後、ライトはお礼を言つてドアの向こうから銀のカーテンを部屋に引つ張り込んだ。今までは、私がやるか、そうでない時は小間使いのおばさんにお願いしていつた夕食運び。それに、どうして今日は侍女さんにお願いしてゐるの？！

ライトは、私以外の女人人が部屋に入るのを嫌がる。だから夕食の給仕だつて普段は私がやつて

いるくらいなのに、今日に限つてどうして……！

「ああ、待つた。ごみがついてる」

「あ……。ありがとうございます」

髪を緩く巻いた侍女さんは、さつと頬を染めてはにかんだ。それは十分にライトを意識した表情だつた。

私の胸は、きしんで痛む。

微笑みながら一礼した侍女さんは、ソファに座つた私と目が合つた途端に、さつと表情を消していなくなつてしまつた。

彼女たちから敵意を持たれるのにはもう慣れた。けれどそれ以上に、ライトが私以外の侍女さんを部屋まで連れてきたことの方がショックだつた。

だつて、ここは二人だけの場所だと思つていたのに……。

ライトはぱたりとドアを閉めて、私に抱きついてきた。

「ただいま、アーシエ」

「お、おかえりなさい」

ライトの顔をまともに見られない。それなのに、私の耳元でライトはくすりと笑う。そんな態度も、絶対わざとだつてわかる。

「どうしたの？ 惨い顔して」

ライトがふ一つとついた深いため息が、うなじをくすぐる。思わず体を竦めると、むき出しの首筋に唇を這わされた。

「や、待つて、食事……！」

「いいよそんなの、あとで」

いつもなら、そのまま流されてなし崩しに事に及んでるところだ。でも、どうしても頭の芯が冷えてしまつていて、素直に流れていけない。

「せつかく持つてきてもらつたんだし、食べなきや！」

「いいよ、じゃあ食べてて。こつちは勝手にする」

そう言いながら、ライトの長い指がするりとスカートの下に這つた。

「あ、やだ、ダメだつてば！ それならせめて、お茶、お茶だけでも！」

「往生際が悪いね。なんで今日はそんなに頑ななんだよ」

身をよじる私に心底呆れたように言うのが癌に障る。だつて、本当に、面白くないんだもの！

こんな気持ちのままキスとかする気になれない！

それなのに、ライトはいきなり顎を捕まえて唇を重ねてきた。

「ん、ちよつ、なんなの!?」

「別にいいだろ、なんでも。ただ、俺の物だつて確かめたいだけ」

その言葉は、私をますます混乱させる。ああやつて、目の前で女人の人を誘惑するような態度を

とつておきながら、私にも甘い言葉をささやく。

一体何が目的なの？ 何がしたいの？ 私をどうしたいの？

「やめて！ 今日はそんな気になれない！」

「そう。エヴァリスなら、その気になるの？」

「なんでそこでトルクスターん様が出てくるの!? 関係ないじゃない！」

至近距離で見上げたライトの瞳は、冷たい光を放つていて、私は疎んじてしまう。

「あるよ。俺の目の前でべたべた体に触るし、だいたい距離が近いんだよ。見せつけられてる気分になる」

「そんなことしてないよ！ だつていつもお仕事のお話だから、邪魔にもできないし、私、困つてるんだけど!?」

「そんなもん、本人にはつきり言えばいいだろ。仕事にかこつけて触るなつて」

「それはライトでしょ！ 昼の時もそうだし、さつきだつて！ 女侍たちにあんなに近づかな
くたつていいじゃない！」

「なんだよ、自分ことは棚上げ？」

「ライトに言われたくない！」

なんでこんなことで言い争わなきゃいけないの!? それに、彼は私が何を言つてのかわからな
いと言わんばかりの表情を浮かべている。私、そんなに変なこと言つてるの？ 呆れたような言い
方が、ますます癌に障つて、こつちも言葉が止まらない。

「ていうか、触るつて言つても、さりげなく指先がかすめていくぐらいで、はつきり触られたわけ
じゃない！ 拒否したくてもうまくいかないし、何か言おうとするともう違う話題に移つてるから、
言いつらいのよ！ 下手に拒否して、相手にその気がなかつたら失礼でしょう！ 私だつて困つて
るの！ なんでわからないの!?」

「全然そんな風に見えなかつたけど？ 楽しそうだし、まんざらでもなかつたんじゃない？」

「勝手に決めつけないで！ そつちこそ、侍女さんとベタベタしてたくせに！」

「そうだと思うならそうなんじゃない？」

ふてぶてしい態度で言い放たれて、かつと頭が煮えた。

「何を開き直つての!? 何のためにやつてるのよ!」

「それは内緒かなあ」

ふつと笑いながらそう言つて、ライトは私をソファに押し倒した。

「離してつ!」

「やだね。そうやつて怒るところ……ぞくぞくするよ」

「意味わからんな……つ、や、あつ……!」

カートに載つていた料理が冷めていくように、私の気持ちもますます冷えていく。

ライトの指先に、唇に、体は翻弄される。でも頭の片隅には、「なぜ? どうして?」と戸惑いつつ冷静に自分を見ている自分がいる。そんな私を、ライトは寝室へと連れこんだ。

その日初めて、私はベッドの中で不完全燃焼な気分を味わつた。

なぜ、どうして、がぐるぐる頭の中で渦を巻いていて、結局なかなか寝付けなかつた。今日は寝不足で頭が重い。

いつもは短時間の睡眠ですつきりするはずの脳も動きが鈍^{うず}くて、書類の行先を間違えたり、レイド様の印をもらい忘れたりと、小さなミスが続く。

こんなんじやダメだ。

お仕事に影響が出るようじや、まだまだだ。少しは侍女として様になつてきたと思ったのに。エルサーナさんみたいな、完璧な専属侍女への道のりは遠い。

レイド様とライトは、今日もラズウェル様のところで盗賊の件についての打ち合わせをする予定だつた。盗賊は神出鬼没で、商家や貴族の馬車に限らず手当たり次第に襲つてゐるらしい。今日も報告が一件上がつてきていて、討伐隊を出さなければならないところまで話は大きくなつていて。

レイド様はその報告書を見て、珍しく考え込むような顔をした。

「今日は辻馬車を襲つたか。金目の物などなさそつだがな。何か他に狙いでもあるのか?」

ライトも渡された報告書を読んで、難しい顔で腕を組む。

「被害は馬と、有り金全部か。とはいゝ、乗客は平民が五人。金目の物を持っていたわけでもなく、手にした金品はたかがしれている。とすると、乗客の中の誰かが狙いか?」

「だが、傷を負わされてはいても、殺された者はいない。誰かを狙つたものではないとするなら……俺たちを釣つてているのかもしれない」

釣りつてことはまさか、討伐隊が出てくるのを待つてゐること? 何のために?

上がつてくる報告を見ていると、最初のうちは商人の荷車や貴族の馬車を狙つてゐるようだつた。でもこここのところ、平民が使う定期馬車や、仕事帰りの農民が相乗りしている馬車を襲うなど、狙いに一貫性がなくなつてきている。それに、捕まえて下さいといわんばかりの頻繁さだ。

私は、レイド様に尋ねた。

「討伐隊にいるはずの誰かが目的、つてこともあるんでしょうか?」

「その可能性もなくてないが、出てきた部隊の殲滅^{せんめつ}を狙つてゐる線も考えられる」

「要は、仕返しということだ。王軍も騎士団も、悪人には恨みを買つてゐるだろうからな。何があつてもおかしくはない」

「なにそれ！ 悪いことをしているのは自分たちなのに！」

「悪人に常識は通じないものなんだよ」

ライトはそんなことは珍しくもないとも言うように、ひょいと肩を竦めただけだった。

悪いことをしたら、捕まるのは当たり前、それが嫌なら、悪いことなんかしなければいい。普通はそういう考えるものだ。

だけど、悪い人たちは、「捕まるのが嫌なら捕まえる奴らをつぶしてしまえ」と考えるらしい。うん、全然理解できません。

「一盜賊団が暴れまわつてゐるよう見せて、実はいくつかの盗賊団が結託してゐるという可能性もあるな。王軍が砦から盜賊討伐に出た隙に、裏で手を組んだ盗賊団が手薄になつた砦を急襲した例も、過去にある」

レイド様の言葉は、私の不安を搔き立てる。今回のことでもしそんなふうに発展していつたら、討伐に出る騎士団や王軍も、ただでは済まないかもしない。

ライトやレイド様が負けるなんて思つてゐるわけではないけれど、何かあつたらと考へるだけできわりと背中が冷える。

「こんな王都の近くで……。だけど王都を襲うことはあるんでしょうか？」

「さすがにここは騎士団と王軍のおひざ元だし、今は奴らが暴れまわつてゐるせいで警戒も厳しい。

町の中にいる限りはまず安全だろうな」

「だけど、人は町の外にもいる」

レイド様の言葉にかぶせるように、ライトの声が室内に響いた。そちらに視線を向けると、執務机に浅く腰掛けたライトが腕を組んでいる。いつもより鋭い瞳とその凍り付くような雰囲気から、彼が怒っていることがわかる。

それはそうだろう、ライトは罪のない人々が傷つくことをひどく嫌う。だから、今回の盗賊団の暴挙は許せないはずだ。

「町の外に住んでいる人々は、今も怯えて暮らしてゐる。今は街道筋で馬車や商団を襲つてゐるけれど、いつ何時、民家や牧場を襲うようになるかわからない。一刻も早く、誰もが安心して町の外に居られるようにするべきだ」

「そうだな。では、時間だ。行くぞ」

レイド様はそう言つて、ラズウェル様のところへ行くべく立ち上がつた。

今回の被害を重く見たラズウェル様は、王軍と騎士団を統括して事の解決に当たることにしたそ
うだ。街道の警備、巡回、盗賊団の搜索などの段取りを、これから打ち合わせで決めていく。

今回は王命により、王軍統括総司令官であるラズウェル様の手に事態の收拾が委ねられた。だか
ら、騎士団もラズウェル様の指揮下に入り、騎士団長のレイド様は、ラズウェル様の命令に従つて動くことになる。

「留守を頼む」

「はい」

「来客は全部断つていいよ。特に男の客はね。絶対ドア開けちゃだめだよ」

「そんなことできません」

「言うことを聞けない悪い子は誰だ？」
濃いブラウンの瞳に覗き込まれて、ドキドキが止まらなくなる。甘さをにじませて笑うきれいな顔は、至近距離だと心臓に悪いのに！

「ちよ、ちよっとー！ もう行くんでしよう!? 私なんか構わなくていいから！」

「昨日から上の空だろ？ 何考えてる?」

その言葉に、昨日のイライラを少しだけ思い出す。

「何考えてる』はこっちのセリフよ!」

思わず言い返すと、ライトの瞳に射抜かれる。

私にあんな理不尽なことをしているくせに、彼の目はまっすぐで、こっちがいたたまれなくなる。「ライトが考へてるようなことは何もありません！ そっちこそ、私に言いたいことがあるんなら、あてこするみたいに女の人とベタベタしないで、はつきり言えばいいじゃない！」

「別に言いたいことなんかないよ。ただ、もうちよと自覚してほしいだけ」

「意味わかんない！ そういう遠回しなの、嫌い！」

「俺にとつては遠回しじやない。もつとちゃんと、俺のことを考へてほしいだけだ」

「考へてるよ！ 毎日頭がパンクしそうなくらい考へてる！」

「それじゃ足りない」

不意に、ライトの瞳が陰りを帯びる。

「もつともつともつと、一日中俺のことを考へて、俺だけを見て、何も手につかなくなるくらいになればいい。そのくらいでも、まだ足りない。満足できない」

「……ライトがどこまで行つても満足しないのは知つてる。だから、それには付き合わない。わかつてるでしよう?」

前に、ライトは「私がダメな子になればいい」と言つて、少しづつ私を深みに引きずり込もうとした。何もできない、何もない、自分のそばにいるだけの人形にしようとした。けれど、私はそんなふうになりたくない。そんなライトと戦うつて決めたから、もうそれには屈しない。

私は負けずにライトを睨み返す。そのきれいな唇に浮かんだ薄い笑みは、妖艶ようえんさと酷薄さを漂わせている。ライトの腕から逃げようとすると、強く引き寄せられて、顎をくいっと持ちあげられた。

「んんっ……！」

そのまま深く唇を重ねられる。

レイド様はとつこく出ていつてしまつて、団長室には一人きり。

淫靡いんびな水音と、荒い息遣いが部屋を満たす。

「つん、や……つ」

「ダメだ、逃げるな」

「う、だ、めえ……っ！」

深く唇を重ねられて、舌が中で暴れる。足が震えて、力が入らない。結局、彼にしがみつくなきできなくなつた私を、ライトは満足そうに抱きしめた。

「君が、俺を見るだけで濡れるようになつたらいいのに」

「変なこと、言わないで……っ！」

「そういう風に、体を作り変えてしまおうか？ そうなつたら、いつでもどこでもアーシェを抱けるのに」

「私は、嫌！ それだけの女なんかに、なりたくないっ」

そんなふうにえつちなことばかり言つて、私を恥ずかしがらせて喜んでいるんだ。ほんとに、悪趣味！

私は震える足を叱咤して、ライトの腕から抜け出した。そして、しつかりと彼の瞳を見つめる。「そういう女の人は、本当は好きじゃないせに」

俺だけ見るとか、溺れるとか、依存させたいとかいろいろと言うくせに、たぶん私がそくなつたらきつと嫌がる。矛盾してて、ひねくれてて、ほんとに子供。

「さあ、もう行つて、お仕事よ」

レイド様はきつと今頃、ラズウェル様のお部屋で待つてゐる。そう言うと、ライトは一つため息をつき、がしがしと髪の毛をかき回してから、すつと雰囲気を変えた。

仕事をしている時の、近寄りがたい冷たい雰囲気に。

「しようがない。じゃあ、行つてくる」「行つてらつしやい」

……そうしてライトを送り出してから、もう二時間が経つ。私はうーん、と背伸びをした。

「なんか、進まない。お茶飲んで、ちよつと休もうかな」

騎士団のいろんな台帳管理は、今は私に一任されている。過去の台帳の整理や、台帳への新規人員分の追加、退役や転属人員の削除、記載事項の変更や更新時期の確認など。人事にかかることがあるから、ことさら気をつけなければならない。でも、今日は進みが悪い。まだ午前中に予定していた分の三分の一しか終わっていない。私は大きくため息をついた。

覚醒作用のある渋めのお茶を選んで、そのお供に昨日もらつてきた焼き菓子を添える。素朴な感じのそれは口の中でほろりと溶けて、ナツツの風味がする。甘さも控えめでおいしい。だけど私の頭はまたライトのことを考え始める。

……盗賊に冷たい敵意を向けるライトは、すごくかつこいい。だけどそれとは対照的に、私に触れる指先は相変わらず熱い。

……どうして急に女人をそばに置くようになったんだろう？
それは、割り切らなくちやいけないこと？ 慣れなきやいけないこと？ 見て見ぬふりをするべき？ それとも真つ向から嫌だつて言つた方がいいの？

どうするのが一番いいんだろう？ 恋愛に関して、私はまだ経験も少ないし、男の人はライトし

か知らない。だから、こういう時どうしたらいいのか、わからない。

こんなこと考へてる時点で、もうすでにライトに頭を上^か領されてる。

「私はまだ子供だなあ……」

ペたん、と机に突つ伏して、つぶやいてみる。

ライトみたいな年上の男の人のそばに居て、背伸びしていないなんて言つたら嘘になる。ライトの周りは、ただでさえきれいで大人な女の人たちばかり集まっている。少しでも追いつきたい、負けたくないって、どうしても思つてしまふ。

専属侍女として勤めるなら、どんな時も動じた様子を見せてはいけないってエルサーナさんも言つていた。だから、自分なりに一生懸命やつているつもりだけれど、それがライトの瘤^{かん}に障るらしい。

特に、エヴァリス様のことになると、なおさらむきになつているような気がする。

ライトの考えすぎ、私は気にしない、という姿勢を貫ければいいのかもしれない。だけど、私はそれだけでは割り切れない。

エヴァリス様は悪い人ではない。けれど、私がなんとなく突き放しきれないところに付け込んでいる節がある。

それにやつぱり、「どうして私に近づくのか?」という根本的なところが引っかかるて今一つ信^{さわ}用できない。

毛色の変わつたのがいることが面白くて近づいてくるのか、純粹に私に興味があるのか、それと

も何かの策略なのか? いずれにしても、あの方が何を考えているのかがわからない。

エヴァリス様になびく要素なんて私の中に一つもない。それくらいライトも^{氣づいてくれたつて}いいのに。

いろいろと取り留めのないことをつらつら考へてゐるうちに、時間は過ぎていく。そろそろ休憩も終了だ。

と、ガチャリとドアが開いた。

「お帰りなさい!」

「ああ」

「ただいま」

ちようどいいタイミングで、二人が戻つてきた。何やら難しい顔をしているのは、進展があつた

からか、なかつたからか。

「お昼近いですけど、お茶淹れますか?」

「ああ、もらおう」

「俺も」

「はい」

昼の休憩まで三十分を切つていた。一人とも執務机に座つたのはいいけれど、お仕事をする様子はない。中途半端な時間だからとりあえずお茶にして、仕事は午後に回すことにしたのかもしれない。

その時、ドアがノックされた。

「入れ」

「失礼します。グランツ団長、お忘れ物ですよ」

ひょいと顔をのぞかせたのは、エヴァリス様だ。今ちょうど彼のことを考えていたところだから、知らず知らずのうちに緊張してしまう。

エヴァリス様は、手に持った書類をレイド様の机の上に置いた。

「……ああ、すまんな。こちらから取りに行つたのに」

「いえいえ、いいんですよ、お気になさらず」

……ライトの視線が痛い。

だから、押しかけてきたのは向こうの方で、私は何もしてないでしょー!? ライトの言いたいことはわかる。だって、私もそうじやないかと思うから。

つまり、エヴァリス様は書類をダシに、私に会いに来たんじやないか、つてこと。エヴァリス様の笑顔は、まるで貼りついているみたいに見える。だから余計に私は彼のことを胡散臭いと思ってしまうんだ。

「あ、グレイさん、私にもお茶をください」

「は、はい」

エヴァリス様にニコリと笑われて頼まれれば、嫌とは言えない。だけど、返事をした途端、ライトに囁みつかれた。

「アーシエ、返事しなくていい！ そんな奴にお茶なんか淹れるな！」
「で、でも……」

一応、お客様だし、ここで断つたらただの嫌がらせでしょ！

「そんなつれないことを言わないでくださいよ。盗賊団の捜索に関しても最大限の便宜を図りましたって」

「それとアーシエのお茶は、話が別だ」

「……あなたも面白い人ですね。グレイさんが絡むと本当に人が変わる。いつもの取り澄ました顔が滑稽に見えてきますね」

「いつもスカしてお前に言われる筋合いはない。ケンカを売つてるなら買うぞ」

「そんなつもりはありませんよ」

なんか息が合つてるように見えなくもない。けど、腹の中で何考えてるかわからぬ者同士の会話つて、二つも三つも裏がありそうで苦手だ。

私は三人分のお茶を淹れる。そして「アーシエ、淹れなくていいって言つただろ！」と怒鳴るライトを無視して、エヴァリス様の分をソファセットに置いた。

「エヴァリスもいることだし、せっかくだから、今渡しておく」

その時、不意にレイド様が白い封筒を三つ、執務机の引き出しから取り出した。そして、それに手渡す。ライトと、エヴァリス様と、私にも。ライトは苦虫をかみつぶしたような顔で、それをさっさとポケットにしまつてしまつた。

エヴァリス様は、さつそく中を開けて、おめでとうございます、とレイド様に述べた。

なんだろう、何が書いてあるの？ とどきどきしながら封を開けると、透かしの入った淡いラベンダー色の厚い紙が、二つに畳まれて入っている。

広げてみると、夜会の招待状だった。それも、レイド様とエルサーナさんの婚約披露のパーティ！

「わあっ、正式にご婚約されるんですね！ おめでとうございます！」

「ああ、ぜひ来てくれ。エルも待っている」

エルサーナさんは、結婚と同時に専属侍女をやめることになつていて、今は引き継ぎと結婚準備で、お城と公爵家のお屋敷を行つたり来たりして、王城にいないことの方が多い。彼女になかなか会えなくなつてしまつて、私はちょっとさびしかつた。

「で、でも、私なんかが行つてもいいんでしようか？ ダンスとか踊れないですし」

そうなんだ。私は、侍女として夜会の場に出たことはあるけれど、お客様として参加したことはない。マナーも知らないし、ダンスだつて踊れない。出たつて恥をかくだけのような気がして、不安だつた。

「構わん。きれいに着飾つて、うまいものでも食べて帰ればいい」

「本当に、それでもいいんですか？」

「ああ。もちろんだ」

「それでいいなら、ぜひ行きたいです！」

とはいえるもちろん、マナーや作法をお勉強して帰つてくるつもりだ。うぬぼれるつもりは少しもないけれど、ライトやエルサーナさん、レイド様とかかわりがある以上、もしかしたらこの先、こうして夜会に出ることがあるのかもしれないし。

「エルだけでなく、公爵夫人のシルヴィーヌ様も、お前と話すのを楽しみにしているそうだ」

「本当ですか!? で、でも私、何をお話ししたらいいか……」

少し前のことだ。私とエルサーナさんは、自分の野心のために人身売買をしていたハーウエル侯爵一味にさらわれた。もちろん、ライトとレイド様が助けてくれたんだけど。

それがきっかけでレイド様とエルサーナさんが内々に結婚を決めた時に、私はウォーロック家のお屋敷で行われた、内輪でのお祝いの食事会に招かれた。そしてライトとエルサーナさんのお母様であるシルヴィーヌ様に初めてお会いして、お話をさせていただいた。

何せ相手は公爵夫人、しかも今の国王様の実の妹君だというんだから、私にとっては雲の上のそこのまた上くらいの人だ。緊張しすぎてほとんど記憶がない。すごく優しく接してくれたことは覚えているけど、それでもライトのお母様だと思うと、失礼を仕出かしたりしないかと心配になつてしまふ。

「そう緊張するな。気さくでいい方だぞ」

「は、はい。がんばります……」

夜会なんて、ただでさえ緊張するのに！ でも、きれいなドレスや優雅なダンスには、どつても憧れる！

前にお城の夜会に出た時は、専属侍女としてだつたし、しかもラズウェル様付きだつたから気が抜けなかつた。それに、夜会の途中でハーウェル侯爵の手下が騒ぎを起こしたおかげで、最後までいられなかつた。

「トルクスターーン様も招待されているんですね！　あ、でも」

「そんなに親しかつたんですか？　なんて、うつかり直球で聞いてしまいそうになつて、慌てて言葉を呑み込んだ。

それを察したレイド様が薄く笑う。うう、失礼なことを言いそだつたってわかつてます！　直前で呑み込んだから、気づかなかつたことにしておいてください！」

「俺が昔、王軍にいたことは話したか？」

レイド様がかわりに答えてくれる。

「あ、はい、地方砦に入団されて、少ししてから騎士団に推薦されて王城に上がつたと、エルサナさんから聞きました」

そう、エルサーナさんに聞いて知つただけれど、レイド様は地方の出身だつた。立ち居振る舞いが洗練されてるから、なんとなく王都の人のような気がしていただけれど、実は地方で王軍に入隊して、砦に勤務していたのだそうだ。

「当時俺が世話になつた大隊長がいてな、騎士団へもその方が推薦してくださつた。剣やチエスや女遊びも、一通り教えてもらつた。俺にとつては師匠と呼べる方だ。エヴァリスは、その大隊長の三男にあたる。知らない仲でもないというところだ」

「ええ!?　それは、意外なつながりですね！　お互一面識はあつたんですか？」

「実は俺はあまり覚えていなくてな」

「私が初等学院に行つていたころでしたからね。顔を合わせる機会はそんぞうありませんでしたから。でも、私は覚えていましたよ。たまに来る父の来客の中でも、グランツ団長は際立つていましたから」

「どんなふうにですか!?」

食いつく私を、レイド様は苦笑して見ている。

「色々ですよ。大きいし、怖いし、あまりしゃべらないし。それに、時々家で私の父と剣を交えたりもしていました。二人の打ち合いは、それはすごかつた。よく家の中から見とれていましたからね」

「すごかつたのは大隊長殿だ。俺など、軽くあしらわれただけだ」
「そんなことはありませんよ。砦にいてすら、グランツ団長の剣の腕はとびぬけていましたからね。今でも憧れますよ」

エヴァリス様が言い終わらないうちに、珍しくにやりとレイド様が笑つた。

「そう言うなら、秘書官などやつていないで、武官になれ。お前ほどの腕を、埋もれさせておくのは惜しい」

「嫌だな、私はしがない文官ですよ。剣なんて振れません」

「そう言って、エヴァリス様はレイド様の言葉を軽くかわして人懐っこく笑つた。私もつられて

笑う。けれど……ライトが、さつきから一言もしやべらない。私が淹れたお茶はどうに飲み干して、不機嫌そうに決裁書類を処理している。

私でもその様子に気づいたくらいだから、レイド様だつてきつと気づいているはず。だけど、レイド様は一言もライトに声をかけなかつたし、別段気にするそぶりもなかつた。

一体何があつたのか、さっぱりわからない。レイド様と部屋に戻ってきて、婚約披露の夜会の招待状をもらつただけだ。一体それでどうして不機嫌になるのだろうか？

ふくてくされた様子で一言も発しなかつたライトの態度が、気がかりだつた。

2

夜会まで一週間を切つた時、ライトがドレスをプレゼントしてくれた。私はお仕事で忙しくて夜会に着るドレスのことを考える暇はなかつたし、今までドレスを仕立てるお店になんか入つたこともない。それでエルサーナさんに相談しようと思つていたところだつたから、すごくうれしかつた。孤児院にいたころ、通りに面したお店の窓から、素敵なドレスをよく眺めていた。同じ年くらいの女の子が、笑顔で次々と試着していくのを、ため息をつきながら見ていたつけ。本当に羨ましかつた。

だけど、お金持ちの貴族の方はお店でドレスを買つたりしないということを、お城に上がつて初

めて知つた。

仕立て屋さんとデザイナーさんを呼んで、布地や装飾品、靴からバッグに至るすべてをまとめでデザインして、発注する。しかも、お金に糸目はつけない。私はその話を聞いて卒倒しそうになつた。

できあがつたドレスのお値段が、孤児院の生活費の一年分くらいに相当することを聞いた時などは、笑うしかなかつた。
だから、今この手の中にあるドレスも、怖くてお値段は聞けない。そもそもそれを聞くことはマナー違反だ。

クリーム色の生地が裾にいくにしたがい夕日の色に染まっていくオーダーメイドのドレスには、淡いオレンジの糸で繊細な花の刺繡（じゅう）が施されていた。ごでごでと飾り立てられるのではなく、すつきりとシンプルなデザインで、裾がふわりと広がつて、すつごく素敵！

「ライト、このドレス、すごくきれい！ ありがとう、大事に着るね！」

「夜会の衣装は、一度きりだよ。繰り返しに着けるものじゃない」
「わかつてん！ でもたまにお部屋で着てみるのはいいでしょ？」

「……ああ、かまわないよ」

その時、一瞬ライトの表情に陰がよぎつた気がしたけど、素敵なドレスにはしゃぐ私は気にも留めていなかつた。